

## 正信念佛偈 28

### ■道綽讚①

**道綽決聖道難証**

道綽、聖道の証しがたきことを決して、  
ただ淨土の通入すべきことを明かす。

**唯明淨土可通入**

万善の自力、勤修を貶す。

**万善自力貶勤修**

円満の徳号、専称を勧む。

### 現代語訳

道綽禪師は、聖道門の教えによってさとるのは難しく、淨土門の教え  
によってのみさとりに至ることができることを明らかにされた。

自力の行はいくら修めても劣っているとして、ひとすじにあらゆる功  
徳をそなえた名号を称えることをお勧めになる。

~~~~~

### ■第4祖・道綽禪師

AC.562～645（84歳往生）

・曇鸞大師示寂後、20年後（聖德太子 574～622）

**☆道綽教学の背景 = 末法思想への意識**

**三時思想**・・・正法、像法、末法

⇒ 仏教の歴史観（釈尊滅後、仏教が徐々に衰退していくという思想）



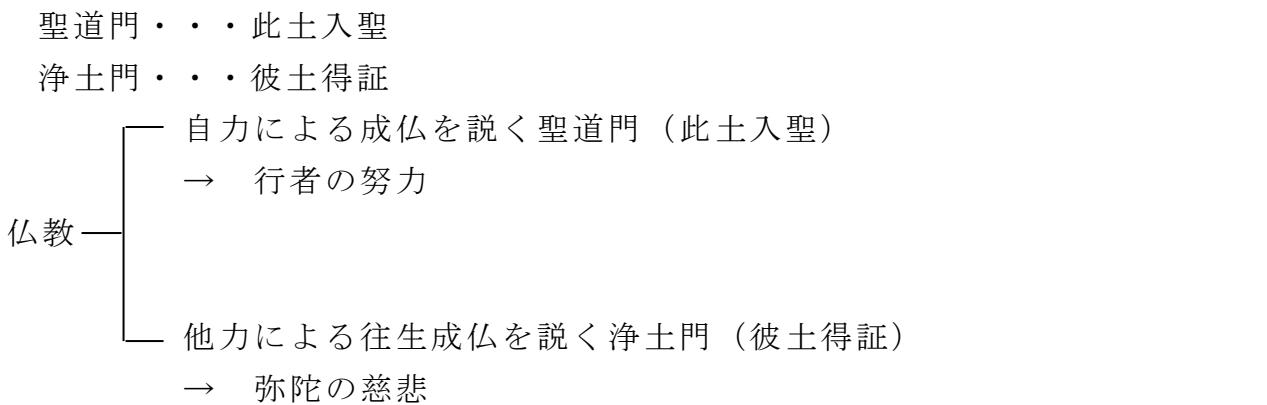
|                 | 教 | 行 | 証 |
|-----------------|---|---|---|
| 正法（釈尊滅後 500 年）  | ○ | ○ | ○ |
| 像法（その後 1000 年）  | ○ | ○ | × |
| 末法（その後 10000 年） | ○ | × | × |
| 法滅（その後）         | × | × | × |

『安樂集』第六大門（『註釈版〈七祖篇〉』・271頁）

第三に經の住滅を弁ずとは、いはく、「釈迦牟尼佛一代、正法五百年、像法  
一千年、末法一万年には、衆生滅じ尽き、諸經ことごとく滅す。如來痛焼の  
衆生を悲哀して、ことにこの經を留めて止住すること百年ならん」（大經・  
下意）と。この文をもつて証す。

→ 末法元年 = 552年

道綽禪師の教えは、自身が生まれた末法という時代と、機縁の仏道を歩む上の  
能力が強く意識される中で醸成されていく。（約時被機）



法然聖人「浄土宗大意」

聖道門の修行は、智慧をきわめて生死をはなれ、浄土門の修行は、愚痴にかへりて極楽にむまる。

『親鸞聖人御消息』第六通（『註釈版』・771頁）

故法然聖人は、「浄土宗の人は愚者になりて往生す」と候ひし  
(今は亡き法然上人が、「浄土の教えを仰ぐ人は、わが身の愚かさに気づいて往生するのである」と仰せになっていたのを確かにお聞きしました)

『安樂集』第三大門（『註釈版〈七祖篇〉』・241頁）

一切衆生みな仮性あり。遠劫よりこのかた多仏に值ひたてまつるべし。何によりてか、いまに至るまで、なほみづから生死に輪廻して火宅を出でざる。答へていはく、大乗の聖教によるに、まことに二種の勝法を得て、もつて生死を排はざるによる。ここをもつて火宅を出です。何者をか二となす。一にはいはく聖道、二にはいはく往生浄土なり。その聖道の一種は、今の時証しがたし。一には大聖（釈尊）を去ること遙遠なるによる。二には理は深く解は微なるによる。このゆゑに『大集月藏經』（意）にのたまはく、「わが末法の時のうちに、億々の衆生、行を起し道を修すれども、いまだ一人として得るものあらず」と。  
当今は末法にして、現にこれ五濁惡世なり。ただ浄土の一門のみありて、通入すべき路なり。このゆゑに『大經』にのたまはく、「もし衆生ありて、たとひ一生惡を造れども、命終の時に臨みて、十念相続してわが名字を称せんに、もし生ぜずは正覺を取らじ」と。

## ⇒ 二由一証

- ① 大聖釈尊が亡くなり、時は末法に至っている。（時代）
  - ② 聖道門の教理は奥深く、機の能力は甚だ微弱である。（機根）・・・二由
- ※『大集經』「月藏分」の文より聖道門の難証を示される。・・・一証

法然聖人『選択集』「二門章」（『註釈版〈七祖篇〉』・1183頁）

道綽禪師、聖道・淨土の二門を立てて、聖道を捨ててまさしく淨土に帰する文。

『安樂集』の上にいはく、…《中略》…。いまこの淨土宗は、もし道綽禪師の意によらば、二門を立てて一切を摂す。いはゆる聖道門・淨土門これなり。

⇒ 日本における淨土宗一宗独立の根拠となる文。

⇒ 龍樹菩薩（難易二道）→曇鸞大師（自力他力）→道綽禪師（聖淨二門）

・・・自力聖道門ではなく、他力淨土門に帰することを勧めるのが七祖の伝統。

### ★約時被機（時代と機縁に適応した教え）

『安樂集』第一大門（『註釈版〈七祖篇〉』・182頁）

第一大門のなか、教興の所由を明かして、時に約し機に被らしめて勧めて淨土に帰せしむとは、もし教、時機に赴けば、修しやすく悟りやすし。もし機と教と時と乖けば、修しがたく入りがたし。

⇒自らの仏道を選ぶにあたっては、時代と根機（仏道を歩むにあたっての能力）をふまえるべきである。いかに優れた教えであっても、時代と根機に適合していないければその仏道を歩むことは困難。

⇒時代に関する考察は曇鸞大師に見られない、道綽禪師の教えの特色。

⇒『涅槃經』の学問的研究 → 慧贊<sup>えさん</sup>教団での実践的修行 → 淨土門（鈍根の凡夫が救われる道）

### ○「万善自力貶勤修 円満徳号勸専称」

#### 称名念佛の勧め

『安樂集』第一大門（『註釈版〈七祖篇〉』・188頁）

第四に次に諸経の宗旨の不同を弁ずとは、もし『涅槃經』によらば仮性を宗となす。もし『維摩經』によらば不可思議解脱を宗となす。もし「般若經」によらば空慧を宗となす。もし『大集經』によらば陀羅尼を宗となす。いまこの『觀經』は觀仏三昧をもつて宗となす。もし所觀を論ずれば依正二報に過ぎず。

⇒ 念觀両宗（称名念佛・觀相念佛）

『安樂集』第一大門（『註釈版〈七祖篇〉』・184頁）

いまの時の衆生を計るに、すなはち仏世を去りたまひて後の第四の五百年に当れり。まさしくこれ懺悔し福を修し、仏の名号を称すべき時なり。もし一念阿弥陀仏を称すれば、すなはちよく八十億劫の生死の罪を除却す。一念すでにしかなり。いはんや常念を修せんをや。

⇒ 善導大師による称名念佛一行の純化へ。

『教行信証』「行文類」(『註釈版』・141頁)

この行はすなはちこれもろもろの善法を摂し、もろもろの徳本を具せり。極速円満す、真如一実の功德宝海なり。ゆゑに大行と名づく。しかるにこの行は大悲の願（第十七願）より出でたり。

⇒ 円満徳号の専称（勸）

⇒ あらゆる善根功德を満たした「南無阿弥陀仏」の名号

『一念多念文意』（『註釈版』・692頁）

「功德」と申すは名号なり、「大宝海」はよろづの善根功德満ちきはまるを海にたとへたまふ。この功德をよく信するひとのこころのうちに、すみやかに疾く満ちたりぬとしらしめんとなり。しかれば、金剛心のひとは、しらずもとめざるに、功德の大宝その身にみちみつがゆゑに大宝海とたとへたるなり。

### 【MEMO】